

て深きゆへなり、見る人恐る、窟中のよこ廣きところ五間半ほど、その中に船に衆て入窟中に入て見上れば、てん上のごとくにして、ことごとく角柱をつがねたる橋を見るがごとし、その天上の柱、石の上よりたる、事、長短ひとしからず、その窟中に舟の入事四拾間ほど、その半過よりすこし東へまがれり、その奥の水なきところ、船よりあがり行ば、しら砂地なり、その地にあがりたる人、あるひは五七間、十間程行といへども、その奥はなはだらくしてすさまじく、ふかく入事あたはず、穴の中に蝙蝠多して面をうつ、亥かるゆへ、いにしへより其極るところを見る人なし、里人の云、近來或人この奥を見んため、燈を燈して窟の内にふかく入て、沙土を歩行けるに、窟中俄に鳴動し、あわ起りて甚恐るべし、人皆おそれていそぎ退き走り、船に乗て歸ると云、また此大門の東の方に、大門の岩山を離る、事三四間にして、水中に岩石あり、長さ五六間、高さ水上より三間餘程、この岩もまた四五寸の角柱を横にかさねたるごとし、是にも洞穴あり、民俗、海鮪穴と云、または同北風烈して、洋の波此大門の窟を打ときは、そのひゞき數里に聞へて夥し、抑このところ岩壁の奇しき、窟の中虚なる事、世間佳山水の類にあらず、彼韓柳李杜口すといふとも、この美を形容しがたかるべし、まことに天下の奇觀なり、かゝる奇遇は、人の國にはありもやすらん、我日本にはいまだ是にたとへるところをきかずと、たゞうらむらくは、遠き筑紫の僻地にあつて、殊に新羅の國にむかへり、大海原の邊にあれば、沖つかせ絶えず吹て、荒き浪かゝる岩山なれば、夏の日の極て風浪をだやかなる時ならでは、船いたらざるところにして、つねには見まくほしき人も、日をさしていたりがたき事なれば、むかしよりかたり傳ふる事もなかりけるにや、古人の廣く我國の事をえるせし文にも見え侍らず、また歌枕にもものせもらしつる事ならむかし、

〔日本書紀二神代〕既而皇孫○瓊瓊杵尊遊行之狀者、則自穗日二上天浮橋立於浮渚在平處○註而啓穴之空國自頓丘竟國行去○註到於吾田長屋笠狹之碕矣、